

Title	1900年の「無地」 : ベイリー・スコットの住宅論と実作例の考察
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53366
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

1900年の「無地」

— ベイラー・スコットの住宅論と実作例の考察 —

吉村典子／宮城学院女子大学

1, 1900年前後の「無地」の様相

イギリス室内装飾において、19世紀後半は、様々な表現が錯綜する最も複雑な時代であるが、19世紀末には、簡潔性が顕著になり、内装材にも装飾文様のない無地が大半を占めるようになる。この流れに、その後の歴史を知る我々からすれば、モダンデザインの時代が遠くないことを思わせる。しかし、この時代の無地、あるいは、それを含む当時の言葉を借りれば「シンプリシティ」が、モダンデザインへの前段階とは異なるものであることは、既に先行研究からも明らかにされている。即ち、19世紀後半の雑多な装飾群を排し、色彩、形態、雰囲気を統一することからあらわれる「シンプリシティ」である。そして、C.F. ヴォイジー、M.H.B. スコット、C.R. マッキントッシュらの19世紀末～20世紀初頭の調和のある統一的な空間を評して、当時H. ムテジウスが「芸術的空間」と語ったことから、その言葉をもって、この時代の様相が説明づけられてもいる。筆者も同調するところである。しかし一方で、現存する内装をみると、例えば、19世紀後半から20世紀初頭に住宅内装に盛んに用いられたタイルにおいては、19世紀末には文様のない無地がよく使われるようになるのであるが、意図的ともいえるほど釉薬に溜りがあり、単色でありながら変化に富んだ表情が表れている事例がある。前掲の建築家の中でもスコットの空間に特によく表れおり、彼は、当時無数のタイルメイカーがあった中で、ウィリアム・ド・モーガンのタイルを用いている。この頃は乾式圧縮成型タイルが最もよく普及していたが、ド・モーガ

ンは、粘土を捏ねてつくる湿式の素地を用い、豊かな文様表現で知られていた。スコットはその無地をあえて用いているのであるが、湿式素地であるが故に、そこには変化に富んだ表情があらわれ、それを広範囲にわたり使用している。これらを見ると、無地が、モダンデザインへと続くものではないことはもちろん、調和や色彩的統一だけではない、別の意図を思わせるのである。それが、この1900年前後の様相をさらに明確にするものと考えられ、本研究では、スコットを対象に、その住宅論や実作例の再考を行った。

2, スコットの「シンプリシティ」と「ホームリー・コンフォート」

スコットは、多くの論述を残しているが、その中で一貫して述べているのが、住宅には“simplicity”と“homely comfort”が必要であることである（以下カタカナで表記／「」はスコットの言葉の引用）。

「シンプリシティ」については、スコットの場合は、豊かな文様のある装飾があるにしても、歴史主義的様式のレパトリーを取り混ぜた19世紀後半の表現からすれば、はるかに簡潔で統一的である。そこに彼の意図した「シンプリシティ」の意味と表現の一側面があるといえるが、それは、造形的もしくは装飾デザイン的視覚性からみた「シンプリシティ」の評価といえる。彼の著述をさらに読み進めると、この「シンプリシティ」には、同時にもう一つの彼の理念「ホームリー・コンフォート」とのつながりがあり、また、その結果でもあることに気づく。

家における「コンフォート」は、「やすらぎ」や「居心地のよさ」を意味し、現代においては住空間を象徴する言葉の一つであるが、それを議論しはじめたのは、他国に先んじて職住分離がはじまり、その分離した住まいのありようを問うたイギリスであった。特に19世紀後半にはその議論と表現が活性化したが、それを享受した中産階級が、また、当時の建築家の多くが、そうした家のモデルをかつての貴族の住まいの造形と生活様式に求めたために、貴族が暮らしたような「カントリー・ハウス」が復興し、そこでの主な機能、つまり、客を招くという公的社会的機能が、空間づくりで最も意識されたのである。

スコットは著述や実作例を通して、そうした「家」に対する価値転換を行った。そこに現在の我々が抱く家のイメージの原点をみることもできる。彼は家の公的機能より、「家族の日常生活」を空間づくりの前提とした。その中で間取りの改革を行い、「ホール」を核に、その機能を団欒のための場とし、「ダイニング・ルーム」とつながる流動的空間をつくったり、「ホール」の一部を「ダイニング」スペースにしたりした。その過程で意図したのが、前述の「シンプリシティ」である。それは実際の生活にあわせて無駄を省いていくことを含むのであるが、「実用」だけを目的とするのではなく、そこには「コンフォート」が必要であることを彼は強調する。

3. スコットの住空間に表れる無地

このようにして彼が実践していったことは、歴史主義的装飾や部屋の従来の機能もつ場面を変えていくことであった。そのために、伝統的な間取りを解体し、各部屋の社会的公的記号を剥ぎ取ることが必要であった。それは、単にそれまでの装飾過剰性排除のためだけの「シンプリシティ」ではない、従来の記

号を変えることによるものでもある。そこで、素材そのものと加工材においては無地を用いたのである。しかし、歴史主義的装飾排除や造形的色彩的統一性のためのそれであるとすれば、当時工業的につくられた無地の内装材がその理想を容易に具現化したであろうが、例えばタイルにおいては、あえてド・モーガンの無地を使用したように、手工芸的につくられた表情のある無地を用いている。それは、彼のタイルの深みのある色彩が、スコットの色彩計画に應えるものであったことに加え、そのタイルの単色でありながら均質化されていない素地から表れる「テクスチュア」が必要であったからである。

その要素にこそ「コンフォート」があったのである。この「心地よさ」を含む言葉において、彼は人間工学的な意味でのそれは議論していない。人とモノあるいは空間とを近しくすることが彼のいう家における「コンフォート」であった。さらに、素材そのものや、手工芸的制作過程で生じるモノの「テクスチュア」には「語り」があると彼はいう。そしてそれが住空間には必要不可欠なものであることは、彼の次の言葉からもわかる。「単に機能性だけでは、住まいにおける人間の欲求を満たすことはできないであろう。家はその使用目的にうまく合わせていくことがよいのであろうが、そうした実用性をこえて、人に何かを感じさせる神秘性や魅力を加える特徴を含むべきなのである。」

こうした議論や表現の中に、同じ無地でも、限りなく滑らかで普遍性に結びつく近代建築空間のそれとは異なる意味が浮かび上がり、今日に至ってもイギリスで保持されている住まいの表現を決定づける要素がこの時代に確立したことがわかる。スコットはそれにおいて重要な存在であり、彼の用いた無地はそれを象徴的に示しているのである。